

所長挨拶

「図書館」の楽しみから勉強，研究へ

すがい たけし
須貝 威

(薬学メディアセンター所長)



この度、薬学メディアセンター所長を拝命した。前所長、木内教授が指摘された、電子ジャーナルやデータベースの功罪、電子媒体購入費膨張に対する研究上の危機、インターネット全盛時代における、正しい情報や、総合的な知を提供する場としての責務などは、永遠の課題といえよう。

本稿では、自身が幼少から年齢を重ねるに伴う、「図書館」とのかかわりを紹介する。筆者は1959年(昭和34年)生まれで、祖父母らが誕生祝いに贈ってくれた図鑑や昆虫記・動物記などを通じ、本が大好きになった。小学校の図書室では、分厚い「文学全集」の「児童版」を読みふけり、時のたつのを忘れた。高学年になって地域(区立)の図書館に足を踏み入れ、書棚に一般向けの図書が並んでいるのに驚いた。難しいけれど面白そうな一般書は、借り出すことはできなかったが、牧場の柵を越え、向こう側の違う世界を見た子ヤギの気分だった。

時を経て大学に進学し(1977年)、農学部の3年生ではレポートが増え、学部の図書館を利用するようになった。静謐な空間で教科書や専門書を参考にするうち、当時、授業等で教えられていた知識や技術が、大学や企業のパイオニア(日頃接している先生や先輩)たちのアイデアが不断の努力で積み上げられ、先進国を抜いて世界のトップになろうとしていた、ということを経験論文等で見つけ、お手本にしてチャレンジする意欲が沸いてきた。

研究室に所属し(1980年)、農芸化学分野で卒業研究を開始すると、ある日指導教授から「この、ロシア語で書かれた論文が図書館にあるらしい。コピーして和訳してくれ」と指示され、報告するとともに、セミナー等で内容を紹介した。後に、放線菌の胞子形成・抗生物質産生を制御する物質の先端的研究に発展する一助になった。

昭和の最後(1988年)に本塾理工学部助手として奉職し、化学関係の蔵書・論文誌の豊かさと継続

性に驚嘆すると同時に、大切にしてきた先人の努力に本当に感謝した。化学は100年以上前の情報が、今日の実験に活かされることが多く、別館の集密書架のクランクを動かし、必要な文献を手に入れて目を輝かせた日々が懐かしい。1991年に米国の医学系研究所に留学した時期は、近隣の大学(UCSD)の化学図書館に出向き、駐車違反で捕まらない15分以内に、どれだけ文献をコピーするかが勝負であった。書籍等片付けは全て学生アルバイトの仕事だったが、まさに、「時は金なり」だったろうか。

翌年帰国して、文献ノートからEndNoteなどに移行、文献も紙媒体からPDFに徐々に変化した。自分と、一緒に研究する学生さんたちが「読んだ、使った」論文は全て記録を試み、2019年10月現在、29,597件である。定年退職まであと5年を切っているが、研究者が一生に読む文献の件数が概算され、いかにメディアセンターにお世話になってきたか、改めて感謝いたしたい。

自分の情報取得スタイルは古典的な「芋づる式」だが、これとは対照的な、検索データベースへのアクセスも非常に重要と考えた。2000年頃、化学系の21世紀COEプログラムの推進委員を務めた際、SciFinderのアカウントを1つ増やすため、高額な研究予算投入を進言・運動した。それは実現し、少しか学生さんたちのお役に立てたかと思っている。

薬学メディアセンターは職員・教員の努力により、学生さんたちの意見を取り入れ、本当に集約され、勉強にも研究支援にも、また、情報交換の場としても素晴らしくアレンジされている。筆者が薬学部に転任した2008年以降も、ポジティブにモデルチェンジを重ねている。実は、オープンキャンパスや各種見学会で、キャンパスツアーの停留所の一つとして、訪れた高校生たちから見学の要望が非常に高い。教職員学生のみなさんで、知恵とひらめきを生み、情報共有もできる「広場」に日々高めていきたい。